

特277

551

特277-551



*76W10490

余子著

余子句選

あら野社版

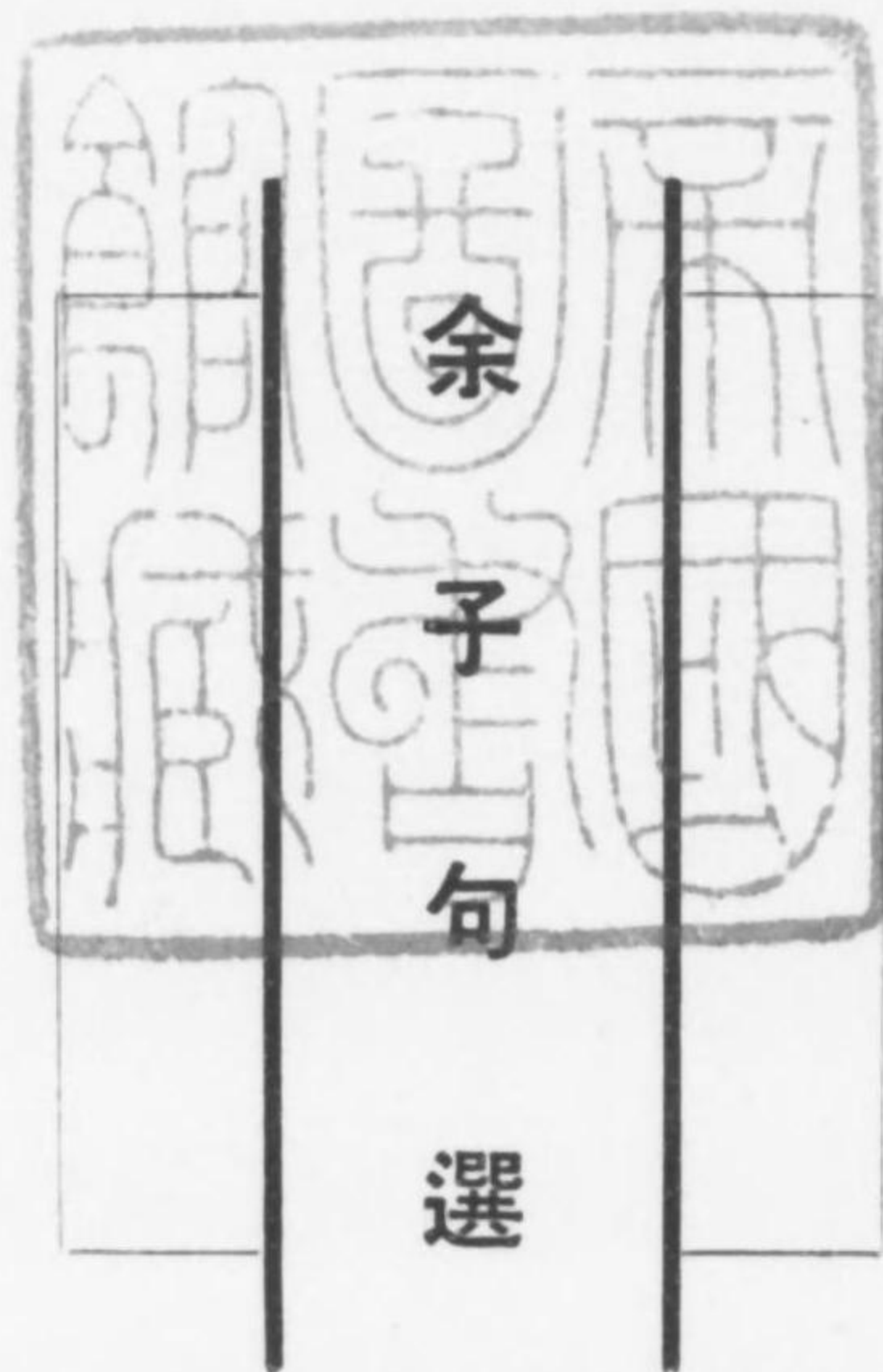
納本



始







小杉余子著

■ 版社野あ ■



凡 例

一、三十餘年間の前半の作品は大正十年刊行の余子句集に收めその後半の一部を本集に收めたのである。

一、句數千百餘句を四季に分ち時候、天文、地理、人事、動、植物の順に排列し同一季題下の句は年代順にしてある。

76W10490



序に代へて

昔からこの銚子といふ土地には、舊正月が来ると、漁師さん達にとつて、惱みの種になるものになまきりといふことがある。それは年が改まつて出漁する第一船をさしてなまきりをやつたと呼ぶのである。このなまきりをつとめた船は、不祥な事があるものと云はれてゐる。十五日、二十日と尻ごみをしてゐると、稼業のことであれば、何かしらうしろからせき立てられる氣持になつて、誰かの船が飛び出す。さうすれば、あとは苦もなくつゞくのである。荒い渡世の船乗りには迷信の多

いことは、一概に笑つてしまへないものがある。が迷信は別として一體にこの土地の人は悠長である。その外に世にも珍らしい親切な人が多いのも特筆すべき點である。

住まば里冬霞して晝砧

昭和十一年二月

銚子草庵ニテ

余子識



新年



霜とけや田舎正月藪本家
正月を温泉にあるや心驕るとも
書き熨斗の文盲にして年立ちぬ
草庵も破らで年を迎へけり
元日や駒とめ石を窓の下
元日やほ句の上なる古こゝろ
歸り帆もはや松過の浦曲かな
千葉縣海上郡初日かな
住みなすや江沿ひの里の初日影

✓
初 風 や 犬 吠 岬 を 畑 の 下
御 降 や 厨 の 煙 こ も り く に
御 降 や 無 事 の 日 永 を 小 止 み な く
御 降 や 水 の 縹 緲 や へ に 消 え
初 富 士 や 城 の 裏 町 藪 ご し に
弱 々 と どん ど に 當 る 日 あ り け り
九 十 九 里 吉 書 揚 と は 見 え に け り

藪 入 や 知 り 人 逢 は ぬ 昔 道
人 ほ ど に 藪 入 る 奈 良 の 小 禰 宜 か な
藪 入 や み よ り 廻 り の 雨 に 傘
若 水 や 一 つ の 桶 へ 二 釣 瓶
若 水 や め で た く き し む 桶 の 繩
門 松 や 熊 谷 在 と た へ に 云 ひ
門 松 や す こ し の 用 に 隣 ま で
餅 花 や 今 年 心 の 早 古 く
繭 玉 や め で た き 色 の 餅 の 白
初 竈 ゆ へ し く 噓 飛 ば し け り

土手三番町と離れてありし年賀かな
廻禮や佗びて住むなる故主筋
禮帳に早々とある一人かな
禮帳の三日にあるや芝居者
大福帳いときびしくも綴ぢにける
乗初や帆のはためきに打たれつゝ
乗初や江口さし來る汐がしら
乗初やたふりと波が二の船へ
萬歳やとばなれ家へ野をすこし
風中や萬歳土手をこぼれ落ち

歌かるたはじむる前の座あるかな
五つ子や舞猿の姿うちまもり
爐に近く猿を舞はすや家の内
猿曳に心惹かるゝさまや猿

上
春
下

船が、り二月の花のなかりけり
如月の爐塞前の句座ありぬ
下屋敷如月寒き水べかな
温室の寒暖にある二月かな
如月や霜月ほどの花もなく
如月と句によまれけりたゞならぬ
花咲くといふ静かさの彌生かな
彌生とて雨塊を動かかしぬ
初蛙葉櫻ころの彌生かな
春めくや宵のト雨尻切れに

春浅き提灯吊るや一の樓
夕煙る田家のさまや春浅し
春浅し畦とはいへど落ち窪み
卯花漬の酢の小鯛や春浅し
ぬれ薪や春が浅いと燃えしぶる
あらくと鋤かるゝ畑や春浅し
春浅し鮪沖漁とてありぬ
早春や渡頭のものゝ風の麥
早春やすこしばかりの納屋仕事
早春や句の道場を山寺に

仲春や小米櫻の白き白
仲春や長春などは植ゑはなし
春深したゞの木になる梅櫻
春惜む心句にあり僧は僧
行春や百姓達の同じ顔
訪ふ人や訪はるゝ我も暮の春
旅了へし綿も抜かばや暮の春
行くといふ春早見えぬ野みちかな
兼題や春も末なる上り築
打水へ柳は鬱と暮の春

春行くや水の筏に野の牛に
惜春賦鳥巢立つより起しけり
呼び歩く利根の蜺や暮の春
行春や燈臺持てる小さき村
春行くやこの半島の二ヶ岬
春行くや汀を持たぬ崖の海
行春や櫻過ぎなる國の牧
大江に波なく春の行く日かな
春曉やきのふを遠き世に思ひ
春曉や雨戸のすき間ひそやかに

春曉や野川行き居る窓の前
水樓や春曙を起き出で
引き切りし潮に波ある春日かな
南國の蘭を養ふ春日かな
春晝や青柳況して糸ざくら
春晝の桃にてかくす織女かな
春晝やこぼるゝ花とちる花と
わが客や酒も置かず春の暮
蒸鱧小鯛も焼きぬ春のくれ
行く船の尾を引く波や春の暮

野に出れば野火の煙や春の暮
山べとて小さき村や春の暮
川口のくびるゝあたり春の暮
寄る波のゆるき眺めや春の暮
春宵やくの字にかけし野路の橋
春宵や田舎街道灯の通る
春宵や我俳諧にこの寂びを
潮の香をもて来る露地や春の宵
春の夜や知る人とせん合旅籠
春の夜や残ると思ふ指の刺

春の夜や謡の文の字餘りに
心凝るたま〜春の一夜かな
われ若く心逸らぬ春夜かな
春の夜や髪を梳くかに襖蔭
灯を置いて春の夜をある渡船かな
春の夜や廣江といふもたと暗く
春の夜や重たう打てる波の音
春寒や能の見所のまばらすき
春寒やさすがに馴るゝ風邪心地
瀬の音の藪につくさへ餘寒かな

句つくりや春冴え返る心忙
冴え返る日をなまぐさの漁村かな
春にあるこの減色の朧かな
山圍むされば朧の都かな
浦里の中の家ごみの朧かな
朧夜や米一升を買ひ提げて
遅き日や溪に汲みたる甕の水
日永さの葉蘭が吸へる手水かな
遅き日や賢者が門の犬の糞
遅き日や倏忽として會の文

六

遅き日や水の戸毎にかゝる橋
芥積めば火をつけて置く遅日かな
遅き日や三月二十八九日
遅き日やストープのある西洋間
遅き日や長流こゝに海に入る
神前に賽すでもなき長閑かな
長閑さやもの遮ぎらぬ身の内外
長閑さや渡し向うのたまり人
麗かや晝食宿の波の音
あまりうらゝにきのふもけふもなかりけり

七

三
溪聲を長口舌とうらゝかな
うらゝかやわれも聖も同じ人
假の世といへどあまりにうらゝかな
暖かや水べの家の皆低く
あたゝかに夕べとなるや仕事多う
あたゝかや盛り上りても小さき波
釣鐘に觸れても見るやあたゝかに
あたゝかや野焼過ぎなる雨となり
暖かや里の片々廣積
(自嘲)春閑にほ句の外なる世を知らず

旅春や三輪のはたごや奈良の茶屋
人々やきのふは寒く浦の春
春遅々や簀の子の干魚磯の波
築杭を組むとは春のこゝろかな

天井の天人の繪や春の空
強東風や岩間引く時潮急に
岩肌や東風に濡るゝと紫に
東風吹くや左右の岬の長短か
今引くと傾く潮や東風の中

東風吹くや岬の鼻は削りすて
強東風や波二つまで打つて引く
東風鳴りといふ汐鳴りや岬北
春風や鳥を吹いて海の上
波尖きののこり消ゆるや春の風
梅若に囃子おこるや春の雨
春雨の降り居る小さき水輪かな
留守に來て上りて待つや春の雨
洲の色の緑増しけり春の雨
春雨や鱒團子を賣りに來る

わたましの一、荷濡れけり春の雨
春雪や軒の玉水連るゝほど
春霖やむかし遠州この好み
春霖や爐邊のものゝ暮れてゐる
春霖や瀬戸の眺めの半ばまで
この里へ神なに下ろす霞かな
春雷や波の打ち引く音の外
雪解くることながくとありにけり
雪解や丹波といへば都近

火桶抱くうつゝなに浮く氷かな
野も堤のわらくく焼くる頃なりき
末黒野も茅屋も雨となりにけり
夕暮の雨や焼野の匂ふまで
山の尾根焼くや夜に入る湖ぼとり
陽炎や松の下より立ちそめて
春泥を藪の井による三戸かな
春泥やわが吟詠す五歩のうち
春泥や夕暮すこし冴え返り
春泥やおのづと畑へ踏みかくる

春泥や甘棠院の名に古く
春泥やなまなか板を敷きしより
春泥や遠山藍に目もくれず
春泥や二戸の戸口の向ひ合ひ
春泥や藪を伐り出すことにして
春泥や鬼一口を灯の下に
春泥や納屋の戸口のいつとなく
水温みけり志賀山を越へ返す
眺めやる時春の水高し
春水へ藪を負うたる草家かな

大江へ春の水行き戻るかな
春水や葛飾生まれ古女房
島蔭の春潮青きところかな
鷗飛ぶや春潮遠く引くあたり
春潮や上げ波渦を持ちながら
御涅槃に逢ひける大和めぐりかな
涅槃會や轉の音の降れる中
初午やのつべい汁に小豆飯
爐塞や板敷を踏む音の外。

爐塞や舟行の賦も淨書して
閉戸先生爐塞ぐ時を持ちにけり
をみな等に俳諧説くや針供養
遮莫婢も僕も出代りぬ
出代や涙をそゝぐ花もなくて
出代やきのふに馴れぬ古釣瓶
佛恩に熱き涙や二日灸
ほのと來るは二日灸の匂ひかな
箕の如きそびら持ちけり二日灸
鶏合時繪の櫻吹雪かな

裏木戸にあほつ戸ありぬ鶏合
夜の雛や雨に迎ふる人もなく
草の家や雛を飾る爐のかたへ
凧の糸は梅の苔をかゝざりけり
追風の凧を負ひけりひたと背に
鞆韃や牆を隔てゝ相知らず
ふらこゝや沖の白浪萌ゆる芝
ふらこゝや隣は鞠に遊ぶ音
野遊や一舟渡すそれも見
野遊や茅花は戦ぎ松は奏で

初筏ことしの花に遅れけり
初筏平原三十里遅々
茶をよぶや春睡ざめの口甘く
春睡やかからく鳴るに玄關子
春睡や楓は影を地に参差
髯剃るや春の睡りの足るからに
春睡や今巻く波の打たんとし
貧乏や目刺の上に関せざる
灰神樂小さきを上げぬ目刺焼く
壺焼やつまみ心の沖の帆々

草餅を重へつめけり手もてせず
草餅や手のあと曇る重の蓋
草餅や口上云はぬ使の子
草餅や塾先生を閑却し
畑打やあら野の中の家ぼとり
畑打は動かす磯馴松は躍る
畑打や暮るゝをしばしうち眺め
畑打や歛の光のたとへなく
畑打や谷と呼びまた郷と云ひ
種蒔くやもろく鋤かるゝ土二寸

物種や老が覚えの反古袋
本山へ便りのぼさで根分かな
句にすらくなほざりごとの菊根分
鳥雲にこれより柳絮飛ぶ野かな
晴れてあれば能登の鼻あり鳥雲に
鶯や讀みては漬かる温泉記
鶯や繪に蕪村句に夜半亭
鶯や厠にあるをいと長く
燕や花の外なる木の緑

燕や古きにしなす水驛
燕や雲雀は空を傾けて
此驛へ天龍落つる燕かな
燕や港川口海を見せ
雲雀野や坂東太郎布の如く
春の荷や芋の如きを蝶追へる
てふくや今神様の鞠ついて
野路の笠渡しへ蛇を伴ひぬ
春も早まどひなかりし蛙かな
桑につく音この頃の蠶かな

いつ掃くや蠶屋の戸口の立て箒
降る雨のつくく止まぬ蠶飼かな
若鮎や高嶺の花を西東
白魚や花の白きに似もやらで
白魚にあはで今年や若菜過
白魚と沈丁と木蓮と蛤と
浦里や米のまづさに櫻鯛
蜆汁花ちる頃の寒さかな
水廣き筑波郡の田螺かな
松並木下りては田螺拾ひけり

梅林の煙うたひぬ小家の鶏
ふと覺ゆ咳の病や梅白し
尻切れの葬行くや路の梅
炭の荷のなほ出る梅の山路かな
早梅や今に湯婆の湯を捨つる
道端やきたなき梅を藪に見せ
梅林や草家がくれに花低く
梅白し俊頼筆の古今集
娶るまでに魂膽ありぬ梅紅し

句案頭恰も椿ある如し
墓山の折りかけ垣の椿かな
ふり仰ぐま近にあるや花の枝
波越えてくゝる落花かな
花吹雪く後の庵となりけり
米磨ぐや日蔭の花のま白さに
夜の花をかぶる門とは驕るかな
花さくや切り上がりたる鱒漁
細ければ一水花に汚れけり
水に沿ふ花の曲りをなしにけり

花のころの下總牧に遊びけり
しばらくは花吹雪くなり淵の石
花の風阿闍梨に虱わかせけり
一輪を大きく見たり桃の花
木瓜垣に俵を置くは客か醫か
連翹や風傷ましむ障子白
連翹や靜かに生ける老大工
水郷の色連翹に出でにけり
海棠や窓より訪はゞ名に立たん
石楠花や山家の庭の石も置き

山吹や庭の捨水行きがてに
藤の根や牛の如きの蟠り
木蓮や風の添ひたる日の潮
人植ゑて蘇枋の色やうとましく
蒲公英や薊に影をうち重ね
蒲公英や朝鮮牛に筑波やま
うたはるゝが故にうつくしき堇かな
ぶちまけて金雀花咲くや五七日
大空の風に風ある茅花かな
露の葦摘みぬ古則の意釋けず

嶺の雪も根雪となりぬ落の蓋
芹引くやこの片里の忘れ水
防風や丘の向うは有磯海
丹田にいたりも着かぬ山葵かな
山葵澤の雨と聞くだに美しき
菜の花や一莖折りしまばらなる
菜の花や入るさの月へけぶるやう
葱坊主わたましの日のせまりけり
旅籠屋のよき灯に泊る柳かな
松の花星ばかりなるいみじけれ

商人や塀を構へて松の花
沖浪も夕べとなりぬ松の花
狗脊や山深み草松の花
枕上_ミ扇の月の木の芽かな
茶の色の濃きに湯をつぐ木の芽かな
みごもると心驚く木の芽かな
木の芽すや茶會といへば向島
木の芽してや、奔流をなしにけり
薬や歌舞伎に墮つる能の品
若草やかくれ逢はざる人の宿

若草やはどきの紐をおのれ踏む
春草やおくれて歩く沓に媚ぶ
菊苗に埃る土あり霜の後
青麥や日毎に吹いて何風
青麥や井戸も榎もあからさま
尿すや二寸の麥の程近く
松籟二寸の麥に落ちざりけり
海苔舟のほとりに波の見ゆるかな
海苔鹿朶や雨の中なる一つ景
海苔鹿朶や東海けふも富士の晴

山住や若布の砂をなつかしみ
九十九里若布の浦もありにけり
一布袋鹿尾菜はるく送られけり
亂礁に國興らざる海雲かな

上
夏
下

路次の木戸や卯月の庭の覗かるゝ
五月の微風何々序曲などありぬ
初夏や路の一本がつくる蔭
痢老師初夏の偈をなしにけり
物買うて團扇貰ひし薄暑かな
敷紙をなじまぬものに薄暑かな
腹ばへばくつものる暑さかな
上げ切りし潮のたるみの暑さかな
荒磯のあまりに干たる暑さかな
露の葉に雨去なしたる大暑かな

浦波も見ればありける大暑かな
涼しさや月になりるる八重葎
涼しさや日を送りたる海の色
涼しさや出岩に潮の瀧を懸け
凌霄の高き暮れけり夏の宵
鯖雲や夏の一夜を秋めかし
明易う茄子は染めると四葩かな
短夜や海の底鳴りふと絶えて
短夜や三里の潮をのぼす江
秋近く二機立てぬ草の宿

哭

秋近き日の透き易き葭簣かな
秋隣るからの夜能の融かな
秋近きこの静か夜の蚊帳かな
夏蔭やおはぐろとんぼ茗荷の子
町中や石屋が松を植ゑて夏
夏を住めば浦家がましや松の中
日盛や波のうねりの見ればある
炎天へ戦ぐものあり峠草
夏雲の真下十里の渚かな

四七

雲の峰見るべき日なり欄に出づ
雲の峰雲の城とも申すべく
灘といふ小さき海や雲の峰
帆の白のまぎれてありぬ雲の峰
雲の峰鹿島灘とはだしぬけに
遠雷や日のある方に白き雲
静かにも早つゞきの在所かな
北へく國走りゐて早かな
十薬の匂なきまで早かな
海の紺く早つゞくかな

露涼し蚊帳吊草は花つけて
夏露や江とも潟とも湖の端
薫風や丘の向うを鹿島灘
薫風や坂東太郎曲る鼻
薫風や断崖十九里の外
薫風や恰も波を待てる岩
山本に里あるかもや五月雨
五月雨やほのかになりし水の蘆
五月雨や軒を煙のたよりなく

降り止みて一しほ梅雨のけしきかな
五月雨や潮來の家のうしろ向き
白雨や灯も入る頃の雷も添ひ
夕立や恰も茶屋にまちなうけ
夕立やこの内浦へ今かけて
南より音來て過ぎぬ夏の雨
時の間の野川濁りや夏の雨
濡れて入る一船あるや夏の雨
水の面へ柳あほつや夏の雨
夏の月洲濱へたゞのけしきかな

港まで丘のうねりや夏の月
長町をなす川筋や夏の月

茶屋に茶を吹きくあるが夏野かな
飛ぶ雲の皆向ひ來る夏野かな
耕すは漁るに似て夏野かな
越えもせずや夏山裾に住まふ人
湛へ居て湧くともなしや草清水
踏みわたる石のゆるぎの清水かな
柚達に清水を祭る心かな

日の筋へとくく落つる清水かな
清水湧き蟬鳴き瀬戸の小島かな
夏川の蘆を浦曲のさまとなり
夏川や何に世渡る古き軒
夏川や鶴つかふほどの大河にて
夏川や瓜はつくらで桑に桑
いと薄く日の當りるし青田かな
青田中ひそかに利根を置きにけり
十家村利根も末なる青田かな
夏海や夜の犬吠野島崎

丸に二引齋藤氏なる轍かな
波荒るゝ日の海驛の轍かな
駕で來し人の下り立つ矢數かな
禰宜屋敷もの靜かなる祭かな
笹一つ朝に賣られし祭かな
一景や祭の山車へ夕べ空
ついでの間や一二の山車の移りるる
夏書僧臂^ひ屈強にありにけり
夕いづも池邊に出づる夏行かな

歸り着いてももの静かなる夜振かな
遠く呼べば近く應うる夜振かな
移りゐる灯のいつまでの夜振かな
庭木戸や晒井すみし開け放し
四五人や隣は井戸を晒すとて
打水や通りすぎもす心せき
桶をもてしたゝか水を打つたりける
打水や松をくゞりて太旗へ
打つて去ぬ水流るゝや一ところ
水打つや水からくりを仕掛け置き

一杓の水うすくと打たれけり
いたく照れば打水三度したりけり
避暑の宿隣合ひけり竹の垣
避暑の戸や機織虫を飼ふまでに
丘鼻のよき家に暑を避くるかな
兎角して主じは避暑に出でざりけり
避暑人の泳ぎもせずや灘の潮
潮浴や眺めのうちに入りもして
泳ぎ子や一むら茂り放れ得ず
潮浴に路はありけり松のひま

泳ぎ子や泳ぎ馴れたる古杭
遠泳や沖に出でたる船の旗
泳ぎ子やかほどに狭き一川邊
夕泳ぎあるはいつものをのこかな
紅ふくむ古き好みや更衣
柏葉に風あり衣更うるかな
ありといへばわが世あるかよ初給
雨合羽給の肌へ覚えけり
つゝしめば息才あるや初給
風狂の老を覚えぬ給かな

美

むかし小野の杜若摺る單衣かな
帷子や痒さまだ來ぬ灸のあと
帷子や冷えを恐るゝ爲人
七十健かに夏羽織かな
一會や薄暑の人の夏羽織
腹當を汗疹の上へいとはや
掛香や京の好みの濃くてよき
日傘行くや波うち寄する
夏足袋をして嬌態もなかりけり
白扇や水の如くはた雲の如く

毛

團扇未だ座にあり合はす一つにて
何かしらぬ繪團扇の繪や弄び
配り來る團扇又してもべた繪かな
竹夫人これを用ひて賢者かな
草の戸に立ちかゝりけり蚊帳賣
爽かに過ぎては冷ゆる蚊帳かな
暫の釣手打てばや心新しく
朝の蚊帳四方の露となりにけり
初蚊帳や朝の本草の透き見えて
簀戸はめてさかしき隣持たざりけり

簀戸の蔭すこし暗きがよかりけり
細脛の冷えてまゐりし葭戸かな
路に降る雨見てあるや青簾
行くわれに呼びかけもせぬ青簾かな
風鈴や垣うち越しの海原へ
風鈴や風強ければ音のと切れ
夏瘦と云ひも了すや何がなし
霍亂や慈悲つくしるる一家中
霍亂ややがて逐はるゝ人の群
霍亂やすこし昇かれて柳蔭

夏風邪やいとなほざりに忘れかけ
夜さへも朝さへもなる裸かな
治國平天下の章や土用干
洞窟の如く住ひて曝書かな
行水やことしは旅を思ひ止み
おしろいの花行水の盥かな
紫陽花や行水過をほのかにて
事多くとも行水をいとなみぬ
晝寝起庭に柏樹子なかりけり
をかしくもふたりして晝寝したりけり

否

一物や晝寝の脚に晝寝人
縁に立つや岐阜提灯にもほのか
蚊遣鉢疊へとれば佗しけれ
蚊火置けば譚めく端居かな
蚊遣鉢さめたる晝のけしきかな
蚊遣すや茂みの窓のいとよしく
芭蕉葉をたばしる音や水鐵砲
家並も長町筋や定齋賣
すこし残るいよく古茶となしにけり
麴や一期の浮沈はねんとす

否

三
妙や何かに出づる古き重
葛水や一塵とむる箸の先
葛水や一椀すでに理をはなれ
皿の繪は梅の花かな心太
けふまでのほかなき色や梅を干す
水廣くそよろに雨の田植かな
田植笠三枚ほどを買うて提げ
畦草に緑まぎれぬ早苗かな
牧守に鶯老いぬ花の後チ

この國を都うつりし浮巢かな
いぬる灯に背けば晝の浮巢かな
雨風に堪へるさまの浮巢かな
廣野來て村里近し蟬の聲
初蟬や風げば淋しき濱の晝
水高く豪雨のあとの螢かな
見てやれば籠の螢の匂ふかな
戸を繰れば觸れて廻りぬ螢籠
螢とぶや小庭ほどなる古戰場
夏蝶や齒朶の茂みにくどり入り

畫見ゆる海原もなし灯取虫
夏虫や畫は菱咲く水ほとり
夏虫や門前の灯寺中の灯
燈臺へ磔す鳥や灯取虫
夏虫や凡そ讀まばかろき本
蟻上り下るや小草花つけぬ
大き蟻草履の足を越ゆるかな
蠅一つとまりがしらを打たれけり
住みついて蠅いとひけり海近く
蚊柱や風に流るゝ上の方

蚊の聲の中に兀たる禿顛かな
蛇多きいはれのあるや傳はらす
一、ところいつも出遊ぶとかげかな
蝸牛や高きにつきて窓の竹
蝸牛や草扉に鏝す二、ところ
蝸牛や古戸のあとの一千里
古宿の十日の雨の百足かな
子子や淋しき顔へ慰めに
急流に隈はありける目高かな
棹させばやらぬ方なる目高かな

棒の如くに皆が皆なる鯉かな
鯉舟灘の潮筋をこゆるかな
茄子まだ鱒の小さきをさかれけり
若葉蔭水の逆巻くところかな
山宿の爐を塞ぐとす若葉かな
夏草の一戸につのるはやてかな
草茂る海にて漁村なかりけり
下闇や二尺明るき草の上
花桐や屋根の葺替長梯子

合歡の木や木蔭につきし牧の牛
片里や栗の花とて雨に垂れ
卵の花をこぼす虫あり晝静か
卵の花に春やたゆたふけしきかな
蝦夷地まで王土としたる牡丹かな
一八に動くものあり桔槔
たまさかに川瀬に帆あり月見草
夕顔や露地のものとして咲きかゝり
水輪すや雨の浮葉のひまゝに
寂光土蓮大きく開くかな

蓮の葉や表の色へ裏がへり
蓮の葉に押さるゝ舟や蓮を剪る
蓮の葉や傾け傘へ騒ぎかけ
人の世へ明け放れたる蓮かな
睡蓮や風落つる時花も葉も
萍や驛の名にある水海道
僧院へ子の釣りに來る花藻かな
藻の花や夜といふものゝ來ては放れ
青蘆や風が渡れば色をなし
筍や江村にして丘を走せ

青梅やまだ／＼雨天つゞくとも
青梅や夕日の色をすこしとめ
梅の實の熟るゝにつれて穂麥かな
箒木や壘一枚ほどつく
箒木や垣の向うの野は月に
麥打つや十八史略上げんとし
麥秋や麥をよろへる馬くるま
麥秋や磯はこのころ鱒の漁
麥秋や麥の刈あと豆二葉
ぎくりはつたんと麥を打つ音よ

上
秋
下

瓜 賣 の 賣 り 仕 舞 ひ け り 炎 天 下 ぎ
瓜 の 荷 を 辻 説 法 の か た へ か な
夏 葱 や 六 旬 の 物 味 淡 く

漁もなき長月果のなぐろかな
けさ秋やひとり漬かりし温泉の溢れ
心中に焚く詩ありけりけさの秋
秋立つといへばや潜む詩の心
秋立つや未生以前も以後もなく
けさ秋や風さりげなく屋を松を
初秋や水を蔑して驕る草
初秋やきのふの方に雲の峰
初秋や漁港のものゝ大観音
初秋の風に驚く仔馬かな

初秋の草のいきれや林中
仲秋や落ちてかゝりし寺の鐘
揚げものに終りの茄子や秋最中
行秋や宿とりあてし山の前
秋と思ふ心きのふや暮の秋
行秋や丙丁童にまた句なし
戦はでつゞくいくさや暮の秋
俗に居て精進とげぬ暮の秋
川波やしゆつしゆと立ちて秋も末
行秋や深く培ふ詩の心

庵ことし醫に隣りけり暮の秋
行秋や野人とよぶも耕さず
返しなき消息をかし暮の秋
行秋や潮來牛堀草の中
山かとも刷かるゝ雲や冬隣
冬隣る夜をこまやかや濤の音
長堀や露地の棒桐冬隣
灯を染めぬ障子の色や秋の暮
俳諧に何ことはりや秋のくれ
謡今何をうたはゞ秋のくれ

庭木戸や押しよせて置く秋の暮
この時や秋の暮ならぬものもなし
隣なき家の出入や秋のくれ
同じさや古きにいへる秋のくれ
藪の井や一方ならぬ秋のくれ
二三度の嵐のあとや宵の秋
秋の夜や序賦譜説事記類を読む
秋の夜や砂利を上げゐる波の音
秋の夜やわれも句をよむ昔人
秋の夜や旅籠をとれば所在なく

夜半秋や人影ならぬ壁の衣
秋の夜や更けしにあらぬ堰の音
秋の夜や伽してやれば子の慕ふ
秋の夜や音なく更けて行くことに
秋の夜や寝ねしばかりを眼さめぬる
祖父までは公家侍の夜長かな
身このまゝが佛と知りて夜長かな
武藏野に昔よりなる夜長かな
夜長さや江といふほどの背戸の海
たゞににじむ額の水墨夜長かな

寺町の土塀石垣残暑かな
鳳仙花残暑がましき草家かな
朝毎の涼しさにある残暑かな
柿の葉のべとりと秋の暑さかな
家々は背戸仕事なる残暑かな
打水の溜りるさへ残暑かな
爽かに漱ぐや松を仰ぎつゝ
朝涼や恰も茗荷汁の實に
やゝ寒や雨に引き置く戸一枚
良寒や一人子なれば負ひ抱へ

肌寒や宿の古壁倚りもせず
肌寒の雨や太木の片濡れに
朝寒や誰も起き出ぬ庵のさま
朝寒の帆ののぼりる大河かな
沖つべやはや朝寒の帆を並めて
木がこめば雨に音ある夜寒かな
戸に觸るゝ葉蘭なりける夜寒かな
夜寒さの宿や浦町一の臺
身に入むや薪水僧の起きわか
芋に冷え蝗に冷ゆる在所かな

秋空や一掃き雲の残したる
秋天や海原などは片隅へ
芋畑のわりなくわれて秋早
秋風や驛に俤を呼べば來る
秋風や故人に似たる途上人
秋風のはじまり吹くや壹岐對馬
秋風や我長養す肚裏の物
秋風の吹いてばかりや瀬の白き
潮騒やざはくくと秋の風

秋風や日のくよりる蓬原
秋風に執すれば句を得ざりけり
秋風や沖にも見ゆる波頭
秋風や岩のかたちの狗に似る
沼の面や菱のかくる、野分跡
野分する日の山水の算かな
野分來ぬ佛の花を剪りしより
霧途に午降る雨となりにけり
灯も暈もかくる、霧となりにけり
秋雨や道にふみ渡る溝の水

秋雨や船の通ひの出洲出島
秋雨や空の明りもぐるり海
秋微雨藁の小村を通りけり
露けさや今のぼり来る二十日月
露千々や花終りたる草の原
露けさや渡し半ばに願る
白露や庭に尼ぜがうしろ向き
草の露うつくしければいとふかな
露けさに山蚊の這へる畳かな
露けさや漕ぎもうつらで藻刈舟

露霜や温泉に滞留の湯にも入らず
名月や心遮ぎる歌の題
客今は下り立つ庭や月今宵
明月や葎畠の風をだに
一時や荒磯に似たる月の雲
月をかけてこの椎山家めかしけり
月の戸に立ちそふや月の戸の主じ
寝るころを月も二十日の野水かな
丘の尾を曳く出岬や星月夜
波だちや帆を張るほどの星月夜

野を越えて宿りおくれぬ天の川
 離々たるや戀々たるや天の川
 稻妻やかくれて住めるにも非ず
 鯖雲や月のありかの秋の聲
 匂はしや花野はづれの蕎麥の花
 秋山や端山芒の雑木山
 蕎麥畑や秋山裾に住めばとて
 落す中に蓮田ばかりや秋の水
 二度出水して歸り行く燕かな

秋出水鶏舍柿の木を襲ひけり
 秋出水夜を啼く蟲の一つかな
 山ノ川ノの大なき里や落し水
 冬をのせて雲日々いたる刈田かな
 洲の鼻の消ゆるあたりや秋の海
 秋海や五艘を並べ皆片帆
 秋海や天津小湊法華寺

一、部屋や棚經僧をとり残し
 棚經やとりつきの間に何もかも

浪荒るゝ夜の打つゞく燈籠かな
燈籠や人の面を照り足らず
燈籠や一ト字もてる長岬
墓參道月草などもなつかしや
藪墓に參るや草のふたげ道
山墓に參るや瀬戸の見えわたり
施餓鬼舟靜かに下しはじめけり
脛抱けばなじまぬものや秋拾
何觀山拙き繪あり捨團扇
秋軒を隣へ高し二階住

麵棒のありか思ひつ相撲ふかな
水に屁の遠くの花火見えにけり
やうく^くに雨濃くなり來花火かな
鉦打つも踊るも彌陀の誓かな
うちそめし音三つ目なる砧かな
しとゝ打てど水は應へぬ砧かな
詩賦類を今暗んずる夜學かな
家の書を読み盡くさる夜學かな
近々と夜學の灯なる障子かな
士大夫に文名ありし夜學かな

下り築田舎の任を彩りぬ
片浦へ霧下ろしけり小鳥網
新米や海遠けれど河の大
新米や葛飾早稻の妻の里
新米や分限といふも五十石
濱松へ飛ばざる鳥に鳴子かな
風年の案山子水年の鳴子かな
鳴子鳴る或は遠く思ひなし
いと繁く夕一しきり鳴子かな
山に向いて大疑現前す案山子かな

六

俳諧未生以前の案山子かな
舟去れば案山子も去ると見ゆるかな
夕田は案山子の影を曳きにけり
今し雨斜にかゝる案山子かな
鳥おどしこれより秋のまことかな
鳥多き山中小里鳥おどし
野の末に春く日ありうるし搔き
新綿や秋は風よりおとづれて
綿を取るこれより冬へ夜長かな
綿弓や道端の家藪の家

七

鶴 鶴 や 湯 の 川 沿 ひ の 古 き 道
鶴 鶴 や 山 谷 川 の 渡 り 石
蜻 蛉 に 誘 は れ 顔 の 小 家 か な
風 物 の 案 山 子 ま だ な る 蜻 蛉 か な
蜻 蛉 や 沖 釣 舟 の 舷 に
蜻 蛉 や い さ 々 か 風 に 乗 り て 飛 び
蜻 蛉 の と ま ら ん と し て 影 す か な
手 水 す や 燈 心 と ん ぼ 立 つ 草 へ
亂 礁 を 下 に 澄 み 飛 ぶ 蜻 蛉 か な

塊 を 塊 へ 飛 ぶ と ん ぼ か な
波 の 舌 つ と 蜻 蛉 を 立 た す か な
蜻 蛉 や こ の 頃 蘆 は 櫛 り
蜻 蛉 や 泛 子 の 三 つ へ 二 つ ま で
蜩 や 山 な き 國 の け し き 夏
秋 の 蚊 や 破 墨 山 水 床 の 軸
片 町 の 氣 安 さ 住 む や 蟲 の 原
蟲 い ろ く す る と の 聲 は な か り け り
蟲 の 聲 雨 の 葎 と な り 了 ん ぬ
蟲 な く や 靜 夜 曲 さ て 夢 想 曲

草雲雀するにあらぬ淡さかな
馬追やある時は秋すさまじく
人々やするとの聲に着し居り
馬追や冷えては鼻のつまる癖
馬追や幼きころのランプの灯
馬追や壁を障子へ夜氣動く
馬追や軒の別れをきのふにて
更けぬ夜を馬追澄まし澄ますかな
馬追や机の灯なる別の灯に
馬追やしきりに秋を御するかに

糞蟲が雨たれ落へわりなけれ
はた／＼やいづれは野邊の枯るゝまで
はた／＼や飛びつくしたる落ちやうに
螳螂や廣野の風にうち向ひ
蚯蚓なくや卵の花頃のねぶげなる
落鮎や温泉より山の奇を愛す
夕潮や鯨の上げ汐芥潮
釣れ来るや水亂すなき鯨の竿
きのふけふ鱗雲なる入日かな
この浦の秋寄りといふ鱗かな

一葉する晴一葉せぬ曇りかな
山柿のまぎるゝ漆紅葉かな
里に一つ似つかぬ倉や花木権
大露のしてかぎろひぬ木権垣
風呂焚くや芙蓉の影も移りて
萩咲くやいつの世誰が植ゑて今
萩の風几に及びけり文のはし
萩むらや靡きかへすと盛り上り
園内に萩あり芭蕉より浅く

畚

あだなれや一菊一莖を抽んずる
わが菊や離々たる菊を見て戻り
朝顔はうす藍に世は義人なし
日にあるや秋海棠の下の土
桔梗や芙蓉がもとの明るさに
桔梗や山蔭の家のたゝすまひ
百姓やこれをうたはで鳳仙花
鶏頭花逢魔が時を立てるかな
鳥邊野へ道の細さの野菊かな
花蓼や太江の露凝るといふ

壺

里の子に草の呼名や蕎麥の花
蕎麥畑や松は大雨に洗ひ上げ
草花の一輪をもて茶事としぬ
草の實や何を占ふ袖のはし
末枯やひとへに鄙を消息し
末枯や人につきたる歌心
山裏は沖つ帆もなし草紅葉
草紅葉するや稻城を崩すより
分けのぼる雲路といはん芒かな
あたくかに日を浴び行くや芒原

降りしきる雨横ざまに芒かな
芒野や海の末なる二千年
岡の家は芭蕉の色に住みにけり
木の實降るや山莊の灯に斜して
掃きもする且音なき木の實かな
柿好きの而してほ句に深からず
山レ水に人信ありぬ柿の里
枝柿のさりとは惜む青みかな
怪我に居る柿の主じや柿の秋
そのまゝに舌に乗りゐる葡萄かな

古き倉古き藪さて柑子かな
大栗を三つといふものたうべけり
行水の名残この方の瓢かな
一つのみわがたのむなる瓢かな
年々を糸瓜つくるや醫賣れず
夢想吟烏瓜のみを疑はず
風流のこれを曳かばや鴉瓜
蠅太く南瓜も大をなしにけり
南瓜や秋は錦の黄金色
南瓜や句に深ければ鈍をなし

矣

愛すべく南瓜は音を持ちにけり
南瓜は凡化衆生の佛かな
南寮も東寮も南瓜煮られけり
踏まれじと今の色なる落穂かな
草庵晩望稻城に秋をきはめけり
杖頭にかけては拾ふ落穂かな
寺とても稲つくりけり人出入
稻舟の下るに逢ふやさも重く
稻運ぶひとりや稲を鎧ふまで
水白きほとりの稻となりにけり

矣

100
稻車しきりに軋り曳き出でぬ
稻運ぶ中を稲舟下すかな
姉妹や織りかけ機の稲の秋
江もあらはに稻刈り伏せてしまひけり
新藁や農のこゝと皆美しく
黍畑や同じ村なる字たがひ
我たま〜世を同うす子芋かな
芋莖干すや庵のことゝてたゞをかし
芋畑の露盛なる岬かな
和尚芋寺男唐辛子かな

朝顔にまがひて一からむ零餘子かな
葉がくれの零餘子見出でし秋意かな
市に出れば薑ばかり見たりけり
薑を秋のものとは慌し
小豆干していとま顔なる小家かな
百姓やわけて小豆とることなど
敗荷やひたすら匠む詩をなみし
敗荷や風狂じたることもなく

上
冬
下

十月や山の寺々時雨月
あたゝかや極月といふほども冴えず
師走とて馬も泊めたる旅籠かな
船腹の寄せ置かれたる師走かな
とり落す士魂商才師走かな
橋に出れば山に逢うたる師走かな
汽車の窓にふりかはる森やけさの冬
けさ冬や野より見らるゝ庵の垣
けさ冬や沼の浮藻に水の筋
初冬や利根の田舎の汽船着場

春隣る心せくこともなかりけり
春待つや江も山もなき片田舎
冬惜む情年々に濃かりけり
さはくくと谷の流や春隣
いたく降りて積らぬ雪や春隣
春近かや七里の漁の海の上
窓のものに野の入相や春隣
春待つや夜着の重きにかゝづらひ
近ければ濃き山なみや冬の朝
短日や外に家なき寺男

短日や山街道の一つ驛
短日や箕にそふ臼の鈍にして
短日や幾分伸びし一月目
短日や窓の明りの爐を外るゝ
短日や十里の外は知らで住み
短日や爐に運びとる竈の火
短日やトコくと呼び機械船
海驛の日の短かさとなりけり
短日や魚屋來てるはかりこゑ
卷雲の一筋冬の夕べかな

山波や冬の夕べの、明り
 人來るや我夜半冬ををかし得ず
 この里や冬の夜長のたまり沼
 冬の夜や隣といへる離れやう
 雁鴨のたける水ある冬夜かな
 冬の夜や風ぐとはいへぬこの静か
 玄關子に冬の夜長のいたるかな
 提灯を押して貸すさへ冬夜かな
 冬の夜や小便小路寺小路
 冬の夜や我俳諧のありどころ

冬の夜やそも提灯の埃臭さ
 親どちに子の合ふ合はぬ冬夜かな
 野を縫うて丘の走れる冬夜かな
 谷里をよめる句にある冬夜かな
 冬の夜や津の賑ひの泊り船
 道の井に絶えて人寄らぬ寒さかな
 森に鳴る風戸につかぬ寒さかな
 鄙寒むやなかごろすこし都住
 うちつとく寒さ漸く無聊かな
 降り出づるまでの寒さでありにけり

寒ければ泣く子と思ふ隣かな
二疊三疊六疊とある寒さかな
且寒し片割月を戸の外に
骨髓に糸引く如く冴ゆるかな
冴ゆるかな恰も月をわたす潮
冴ゆる夜や庵の古戸の鳴りもせで
小春日や岩を越え居る水一重
夕餉まで爐に吊る鍋の小春かな
沼の鴨水も搏たざる小春かな
主従やまた傾くる小春笠

小春日やさまぐ枯れし花壇草
小六月菊ある晴に似たるかな
小春日や朽木櫻を窓のもの
伊丹鬼貫小春の句風ありにけり
うち返す波はありける小春かな
横利根といふ水漕ぐや小春舟
小春日や野路の野葡萄引けば来る
小春日や岬を波はとり残し
冬ぬくし庵の南は茶の木原
冬ぬくしこの一里の水蜘蛛

冬ぬくし大根吊つて留守の軒
鮎賣をニラ朝聞くや寒の内
ほめて食ふ豆腐屋近し寒の内
大寒にはじめての子をまもりけり
大寒の杓沈めけり甕の水
お向うは神主様や寒の内
(我子に)百日の年暮るゝとて泣くものか
(或人に)ほ句などゝ鈍くあれかし年の暮
馬の荷を卸さでよむや年の暮
大年ののどかさあるや灰の尉

冬空や權現堂川村と呼び
冬空や陸カのくびれの船溜り
冬の日や休め畑なる畝かたち
冬の日をたのしむやわれも木の股も
硝子戸をこちへ照り返す冬日かな
北風や釣瓶に上げし水すくな
虎落笛絶え入る音の尾ありけり
木枯や夜は厠を遠きものに
風を堤の木々にあるや窓

木枯の吹きぬく松はよき木かな
 木枯や風除櫓の反りやうも
 日和より時雨れて一夜春に似たり
 俳諧の時雨衆道の時雨かな
 しぐるゝやつくぐ今的心新た
 樂の音や時雨止む時一調子
 傘の手やしぐるゝ袖をうち重ね
 今やらぬ淨瑠璃讀むや冬の雨
 雪の江に沿うて起きざる四五戸かな
 むつかしや人を泊めたる夜半に雪

雪見舟松の下より出でざりけり
 聞説雪のとけざること九旬
 むつかしと雪杳はいて出でにけり
 雪に濡れてけぶれる馬に高荷かな
 暮雪とはまのあたり見ぬ心かな
 この里や雪積む上の雪もよひ
 篠の雪さかしき谷へふるふかな
 雪焼の手や湯に漬けてさましける
 大雪につみ菜賣來る孝子かも
 鉢の木の雪葛城の雪の能

二六
聞人や黛みだれたるまゝに雪
雪の人袂に足袋を置きにけり
篠原の深雪檜原の雪浅し
片側を日うとき屋根や雪を置く
沖浪を見る雪晴の驛路かな
雪舟を持つて旅に泊りを重ねけり
妙高も佐渡もなかりし吹雪かな
雪晴の野川見ゆるや垣のひま
むら竹や雪を催す戦ぎやう
雪折れや古き衰微の藪の家

大雪やものゝ音なき時の音
桑畑の篠の晴れやう深雪かな
大雪の夜の馬宿の人げかな
椎檜の黒木濡れけり薄雪に
蘭萬年青なほ降り足らぬ霞かな
霜よけをせで置く草の多かりき
霜強く尋常に晴つゞきけり
疎く居るや外の面は月の霜柱
家並のをはる戸にあり冬の月
桑畑や照るとも見えぬ冬の月

寒月や鐘樓の鐘の半ばまで

二六

影富士をこゝに落せる冬野かな
湖見せぬ山尖りゐる枯野かな
宿に着いてしばしがほどは枯野かな
刈りこかす柴よけ行くや冬山路
黄瀬川といふ水涸れの磧かな
水涸れやいよく山に對す莊
冬田道中々能登へつゞくかな
氷沼ありすでに伐るとも聞けるかな

冬海や消えくおこり岬の鼻
冬海や畫の燈臺美しく
冬海や日當る間なき亂れ雲
冬海や崖のと切れの小さき濱
冬海や墨落したる一つ岩
冬海や何かはかなき沖の舟
冬海へしきりに炭を焼きにけり
古庵や松を植ゑたる冬景色
戯作者や筆を納めて室の梅

二七

森を天へ灯のときかざる神樂かな
 暗がり三世の諸佛十夜かな
 たのむべしわが寄る里の十夜寺
 お十夜へ心ゆるりと参るかな
 灯の色の赤きがゆるに十夜かな
 藪里を闇つゝむころ十夜かな
 達磨忌や外道俳諧愚俳諧
 芭蕉忌やこのともがらに濁世なし
 藪卷や柿の木畑も一ト構
 藪卷や主ッが納屋を不案内

家々や冬構して梅やある
 人叱つて尙怒る悔や冬こもり
 袖ふるゝ襖の寂びや冬こもり
 緋の色の肘突富むや冬こもり
 跌坐半時胡坐半日や冬こもり
 山住みの心識りたり冬こもり
 今食うてはや來る膳や冬籠
 心ひく庵後の野あり冬こもり
 連れ立つは漁の休みの綿子かな
 聞くことを好まざるさまの頭巾かな

襟卷や寒さはなれぬぼんのくぼ
外套やおとゝひ人のまた通る
足袋はいて心を謙となしにけり
座につくやあまりにかたき足袋の甲
足袋店の女房ほめよ打つて賣る
竿に置いて夕日に叩く布團かな
遊行上人拜みて寝ぬる布團かな
人遂にいつこへ還る布團かな
庭前の柏樹子布團干されけり
寺庭に干して色ある布團かな

わがために敷く押入れの布團かな
膝の書に手も置きあへぬ噓かな
歌仙一卷うら何句目のくさめかな
鼻風邪や手を火に翳すいとまだに
風邪ひくや病めば凡そ大仰に
風邪とのみにたづねもせず忘れける
抽斗の古き匂ひや胼薬
あかどりや母なん藤原氏にてなかり
なか／＼にあかぎれ膏の貝の空
輝や平安君に仕へ僕

柴門へ障子見せけり冬座敷
やゝにして暎に火あり日南ぼこ
いさぎよく朝餉前なる火桶かな
このころをたゞあり馴るゝ火桶かな
火桶して山茶花過ぎの日なみかな
丈高な人通さるゝ火桶かな
嵯峨天龍寺客殿の火桶かな
老刀自の鼻あぶらるゝ火桶かな
外の風を障子の内の助炭かな
山の尾を踏むこの宿の圍爐裏かな

埋火や國老にして詩を講じ
埋火やこの静けさを夏に戀ひ
出で行きて歸り來にけり埋火に
十日あまり旅して歸り炬燵かな
わが宿に一つはありし湯婆かな
先寝ぬる母の老いぬる湯婆かな
人去ねば守り心の焚火かな
我窓へ折々疊る焚火かな
いとなむが如く焚火にありにけり
一濱や焚火の跡のこゝかしこ

櫓の火やはや十能にかゝるまで
炭ひくや日にま向きなる坐りやう
炭斗や世にありやうも儉か
薄雪の炭火深雪の炭團かな
熊野路や炭山なれば浅き山
炭掘くや訪ふ聲を聞きもとめ
避寒人さすらひ人のたぐひかな
或時やおろそかに聞く火事の鐘
狩山や二十日あまりの月遅く
狩倉や靱あてたる岩の角

獵人にあらぬ宿りや山旅籠
日當ればほろゝ寒むなる網代かな
橋守と網代守といづれ年を経し
網代木に長夜の渦の遊ぶかな
旅人に見えぬ山べの網代かな
たゞに焼くも網代にかゝる魚なりけり
はごかけにいとまつくりしをとかな
山鼻のあなたこなたや柴漬けし
前山の雪に伏せたる竹瓮かな
寒聲や隣は露のおみなへし

煤の荷や門の邊までとりまわし
さらでだに寒き一ト間や餅筵
聞きとるや餅搗き上がる杵の音
節季候や長者が門のあたり寂び
掛乞や今に昔の墨の判
鹿賣に主_レ出るともなかりけり
ほうくと吹き喰ふ飯や凝り鮎
風呂吹や坊主畢竟世に執す
湯豆腐や草す俳諧下戸の辯
うつくしき句をそしりけり納豆汁

芋粥や凡そ熱きに鈍き舌
焼芋や行燈の文字に時雨かけ
莖漬や噴井に風の添へばそひ
二畝はしぐるゝものゝ莖菜かな
枕ともならで莖石となりにけり
荒海へ干菜をよろふ小家かな
枯れ來れば浪騒ぐ音の干菜かな
釣干菜草のみみづる疇昔かな
荒壁へわざとしからぬ干菜かな
寒肥や桑の事さて麥の事

麥蒔くや濱方にある漁不漁

熊突が小屋にある時の眼鏡かな
いつも出れば狼岩の名ありけり
狼や山のうしろのかくれ里
坊が妻は狼のことを云ひにけり
笹鳴や連れは遠國小商人
笹鳴や渡しは岸へ流しつけ
暫くは水鳥を見あてざりき
水鳥の寄り癖や江の掃かれたる

江の水のゆたかさ鳩を浮かめけり
やうくに風立ち見ゆれ鳩の水
鳩の水この國山を重ねけり
凍蠅やこれより庵裏色もなく
朱を墨に筆そらしけり冬の蠅
河豚喰うて出離の縁もなかりけり
河豚汁前佛既に去る世かな
甘くして足らぬ甘みや鮫鱈鍋
ふるさとの子にかまけゝりいさな取

山茶花の咲くや忘るゝ迄に過ぎし
梅にして返り咲くことのあはれかな
水仙に尻跳ねといふ寒さかな
尼達が刺る怠りや石落の花
閑適の描けば石落のたぐひかな
月の戸に色消やしけり石落の花
残菊や佛の花に植ゑも置き
菊枯るゝ隣へ嫁ぐるにしかな
句に寄する落葉詩に賦す寒鴉かな
柿色の歌舞伎色なる落葉かな

掃き寄する莖廣葉なる落葉かな
落葉搔き二日の晴を唄ふかな
此里の時雨の下の落葉かな
また下る嵯峨の藪道落葉かな
水隈は鳩の湖なる落葉かな
渡良瀬へ一水送る冬木かな
驕らざるは窈窕とある冬木かな
風騒の宿りあてけり枯柳
横しづく雨冬枯れの漁村かな
草枯に百里の旅を了るかな

枯れくてもかゞやきありぬ
萩原
枯葦の遂に刈らるゝ二丈かな
市中や大根船の並びつき

跋

平谷

俳諧は「行」である。身に宗匠の衣を飾り、口に行雲流水を説へても心に捨身無常の覺悟なくしては眞の俳諧人とは云ひ難い。古人も「一丈を説かんよりも一尺を行するに若かず」と云つて居る。

俳諧に何ことはりや秋の暮
葛水や一椀既に理をはなれ

と、これが余子氏の俳諧第一義への覺悟である。しかし「行」は或完極への過程である。即ち第一義への志向が先づ規範の形に随つた生活である。「道」といふ一のイデーに歸入したところの捨身が要請せられるのはこれが爲である。だから捨身が完極の目的ではない。「道」の實現、身を以て「大道」の顯現體たらしめる、これが俳諧の究竟だ。而してこの究竟なるものへの到達は「悟」を得るより外にはない。古人同じく云く、「一尺を行せんよりも一寸を悟るに若

かず」と。

身このまゝが佛と知りて夜長かな
うらゝかや我も聖も同じ人
佛性あたゝかに虱土龍かな
葉がくれの茄子千佛や一色に
と余子氏は詠ふ。だから、

一輪を大きく見たり桃の花
畑打や鉄の光のたとへなく
と詠ひ、この法悦あればこそ

冬の夜や我俳諧のありどころ
といふ常寂光土の端的が示されるのである。しかし余子氏は佛者ではない、何處
までも俳諧人である。

秋立つといへばや潜む詩の心

心中に焚く詩ありけり今朝の秋
月秋や深く培ふ詩の心
秋風や我長養す肚裏の物

と詠ふ人である。借方も貸方も一切合切帳消しにしまつて白紙となつて油然として「詠ふ心」を湧き起さしめる人である。こゝに身心脱落を通じて來ての脱落身心が現ずるのだ。

夏瘦の身の雲に入る一詩かな
といふ句が詠はれるのも所以あるではないか。脱落身心が現ずれば日々是好日で、到る處遊戯の境ならざるはない。

てふくや今神様の鞠ついて
風流のこれを見かばや鴉瓜
しぐるゝやつくゝ今の心新た

然り、「つくゝ今の心新た」だ。即今目前つくゝ心新たなればこそ余子氏は掬めども盡きざる風雅の誠を我々に味はしめるのである。

禮帳に早々とある一人かな
 乗初や帆のはためきに打たれつゝ
 夕煙る田家のさまや春淺し
 龍夜や米一升を買ひ提げて
 青田中ひそかに利根を置きにけり
 夕泳ぎるはいつものをのこかな
 露けさや今のぼり来る二十日月
 新薬や農のこど皆美しく
 足袋はいて心を謙となしにけり
 草枯に百里の旅を了るかな

『余子句選』容るゝところ實に千百餘句、花あり、月あり、樓臺あり、實相の眞風光に面接し得て無盡藏と云ふべきである。然もその表現に於ける無技巧の技巧、まさに神に入ると評すべく、その含むところ最も深遠にしてその現はるゝところ最も淺簡なる骨法の妙を自在に驅使

したる至藝、蓋し天下の珍とすべきものであらう。氏は詠ふ、
 風狂の老を覺えぬ裕かな
 と、宜なるかな。

あら野

毎月一回
一日発行

最も正しい
俳句・連句の雑誌

定 價
金 參 拾 錢

東京市神田區美土代三丁目

あ 野 社

振替口座東京七四七〇番

あら野社版 余子句選 定價(並製)
八十錢

昭和十一年五月八日印刷
昭和十一年五月十三日發行

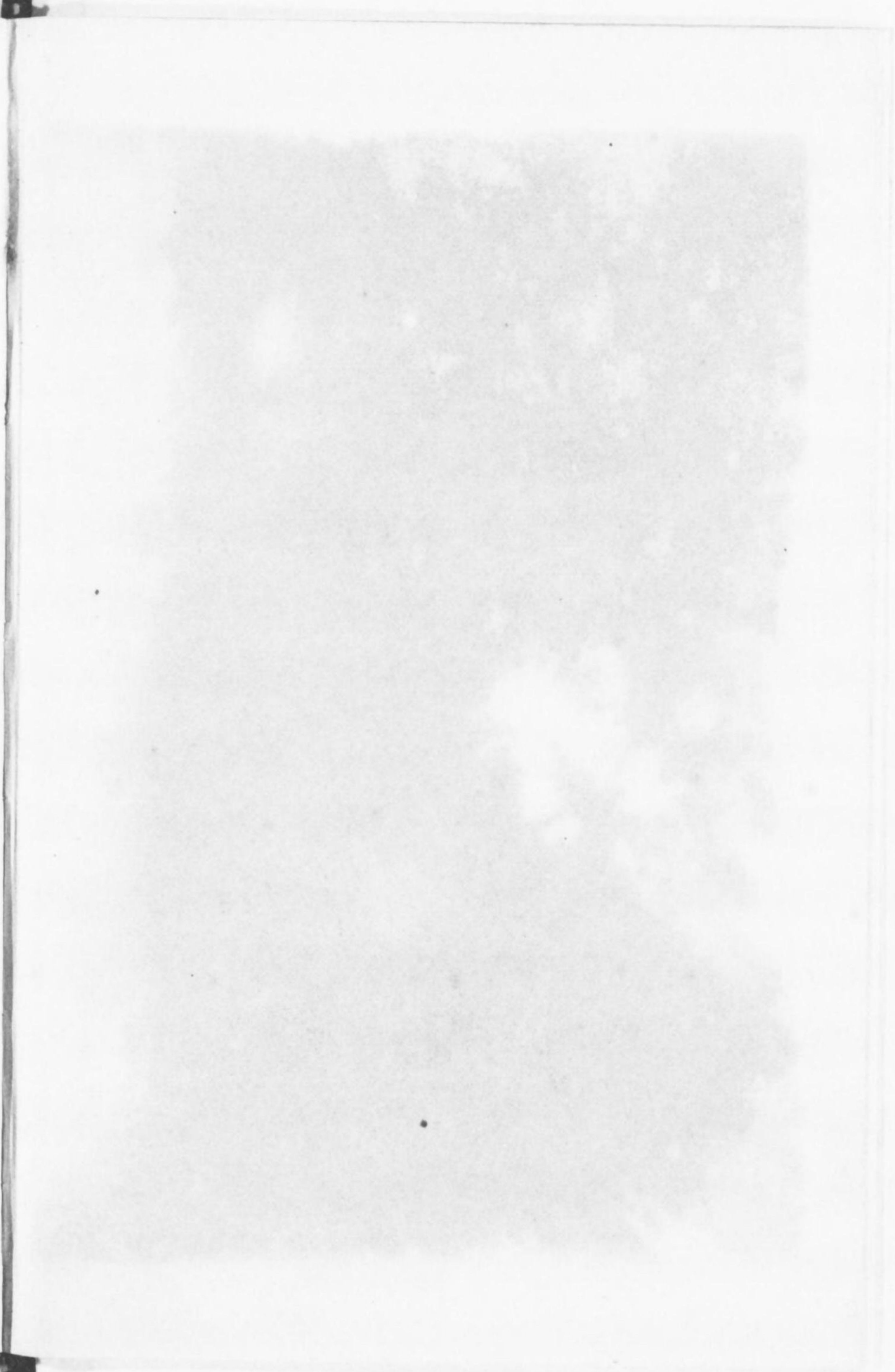
著 者 小杉義三

發行者 岩岡卯吉郎
東京市芝區濱松町二ノ二

印刷者 杉 真一
東京市本郷區金助町二九

印刷所 日興舎印刷所
東京市本郷區金助町二九

發行所 東京市芝區濱松町二ノ二
岩岡書店
電話芝三〇〇五番
振替東京四三九二七番



終